
疵の王と陽だまり王妃

ばいおれんじ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

疵の王と陽だまり王妃

【Nコード】

N1729BA

【作者名】

ばいおれんじ

【あらすじ】

とある王様は火傷で酷く醜い顔をしておりました。故に結婚を諦めていた彼の元へ一つの縁談が。お相手は美姫と名高い宗主国の王女様。その為、王様は一つ勘違いをしてしまうのです。設定シリアス風味なのにきつとコメディ。

卑屈な王様とツッコミ宰相（前書き）

『謳われぬ末姫』 『騎士姫の初恋』 『不器用陛下の両片思い』

『賢姫が愛した庭師』 『紅薔薇姫と銀の蜂』

と共通世界のお話。そつちを読んでいた方がわかりやすいかもです。

卑屈な王様とツッコミ宰相

さてさてようやく今回で王女様方の物語も終了ですね。
最後？を飾るのは第三王女様。

え、なんですか。なんで断言しないのか？
それは後々のお楽しみと言う事で。

彼女の恋もまた、他の王女様と同じく、
長く募らせてきた恋なのでした。

ただ一つ違うのは、彼女の恋は片思い。
相手の殿方は彼女の恋心をまるつきり気付いておりません。
なんせ二人が出会ったのは一度きり。

おかげでどうにか再開にこぎつけたものの、前途多難の様子。

無事に王女様の初恋は成就するのでしょうか？
それではゆっくり見守る事といたしましょう。

「縁談、だと？」

信じられない気持ちから顔が強ばるのが分かる。
他者曰く人を殺せる視線を話を持ちかけた宰相に向けるが、
当の本人は気にすることなく、淡々と肯定を口にした。

「肝心のお相手だがな、ボルケノ。」

「ラドウガ国第三王女セシェルイーズ様からだ」

「……何かの間違えだろう」

「いやぜひお前の王妃になりたいだよ」

涼しい顔で宰相こと、

軍人時代より十数年の付き合いになる親友は言い切る。
手紙を受け取り、目を通すが本当だった。

だがどうも信じられない。どうしてあの娘が俺などに

「しかも王女様直筆と来たもんだ」

「……嫌々書かされたに違い無い」

「は？」

「そうでなければありえんだろう」

「お前ちよつと自信持てよ、ボルケノ」

そうは言われても、己の醜悪さを自覚している以上、
友の言葉は慰めにしか聞こえない。

俺は正式な王族ではない、軍人からの成り上がりである。
その経歴故に体は傷まみれだ。全身にくまなくついている。
更に顔の右半分に至っては火傷で爛れているのだ。
おかげで仮面が手放せない状態。

性格とて褒められたものでない、
特に優れた才がある訳でも、年とて一回り以上違ふ。
そんな男に好き好んで嫁ぐ女性が居る訳無い。
美姫と名高い彼女であれば尚更。

「で、どうするんだ。断るのか」

「宗主国からの慈悲だぞ、断る訳にはいくまい」

「慈悲って……まあ断れないのは確かだが」

「お優しいラドウガ王の事だ。」

この年になっても女の一つも作れない俺を、
哀れんでくださったのだろう。

……それか、監視役かもしれんな。

軍事上がりの荒くれが治めるような国、信頼できまい」

「……それはない、まずない」

「？」

「お前、そんな卑屈になつてどうすんだ……」。

あのな、ラドウガ王つつたら、

単身で大陸一つ滅ぼせる魔力の持ち主だぞ。

最強の魔法使い、わかるか」

宰相が頭を抱えながら言う。

その溜息に含まれているのは呆れと驚愕。

「しかも家族命だ、こっちにまで伝わるレベルの。理解してるか？」

「家族思いの方だろう。知っているが」

「冷静に考えろ、ボルケノ。」

監視役にするなら弱い娘よりゴツイおっさんにする。

まかり間違つて穢されたりしたらたまらんからな。

そもそもここなんか指一本で潰せるんだ。

あの超絶親バカが大事な大事な娘を必要ない人質に出すかつつー
の……」

いつも平靜な宰相が声を荒げて怒鳴りつけてきた。

彼は髪を乱し、ゼーゼーと息を吐く。

初めて見た珍妙な光景にぽかんと呆氣に取られた。

「……だから、お前は本気で愛されてるんだってば」

「そうは言われてもな」

「だっー！そのマイナス精神どうにかしろよー！」

「とりあえず落ち着け、ハルゲン」
「デメエが言うな！」

彼の口調が宰相から軍人時代のそれへと変わる。

長年の鬱憤が溜まっていたのか、

その後もしばらくの間、説教を浴びせられる事となった。

卑屈な王様とツッコミ宰相（後書き）

恋に臆病な王様と、愛に一生懸命な王妃様のお話。
のはずなんです。がヒロインが出てこないミステリー。
お相手がおっさんなのは私の趣味です。

お付き合い下さりありがとうございました！

ここが物語の始まり

「……間違い無いのか」

「はい」

「本当に合ってるんだな」

「ええ」

「本当の本当に彼でいいんだな！」

「私がお慕いしているのはボルケノ様で間違いありません」

念に念を重ねるお父様に、納得が行くまで肯定を。

三回目でわかっていただいたらしく、

……あら、まだダメですかね。訝しげです。

「ボルケノ殿は……悪い奴じゃない、良い奴だ。

でもセシリーより俺の方が年が近いんだが」

「そうですね、でも彼でないとダメなのです」

「……八年前に会ったきりなんだろ」

「絵画を見せていただきましたが、

相変わらず遅しくて素敵なお方でした」

「……引く気は無いのか」

「いくらお父様でも譲れません」

お母様と瓜二つの笑みを向けたところ、

お父様はさめざめと泣き出した。

臣下の方が見たらひっくり返る事でしょうが、

幸い、今はお父様と私の二人きりです。

「ウィーニを皮切りにセラ、リリー、ビアンカ……」

「私、三女なのに随分遅くなってしまいましたねー」

名残惜しそうに嫁いだ姉妹の名をお父様はあげていきます。
そんなお父様へ呑気に口に出したところ、

お父様は更に嗚咽を強めました。

どうも追い打ちをかけてしまったようです、あらら。

私は五人姉妹の一応真ん中となります。

あ、一応というのは、もうすぐ六人目が生まれるからです。
唯一城に残ってるピアンカは政治向きですが、

やはり次は弟が良いですねー、妹でも可愛いと思いますが。

話が脱線しましたね、スミマセン。

周りの方の話を聞く限り、

大体長子と末っ子が可愛がられるとのことですが、

私はこの通り、半端な立場にも関わらず、溺愛されてきました。

お姉様も妹達も物凄く可愛がられてますけれど。

にもかかわらずここ最近、

末姫の結婚を機に次々と姉妹が嫁いでいきました。

竜とか、王族とか、公爵家とか、

そういえば騎士を婿入りさせたりもありましたね。

そのせいでお父様は寂しくて仕方ないようです。

だからただ一人残った私へまだまだ嫁にはいかせないぞ！

と張り切った矢先に「結婚したい方がいる」と告げたものですから、
全力で引き留められました、ですが私は笑顔で一蹴にしました。

下の姉様に見かけと反して鬼畜だと言われましたが諦めきれないのです。

ボルケノ様。私の初恋のお方。

あれから随分と経ってしまいましたが、
まだボルケノ様に王妃様はおりません。

あんなにも素敵なお方です、世の女性が放っておく訳がありません。

私のような子供では満足いただけるとは思いませんが、
それでもどうしてもあの方の妃になりたいのです。

その為であれば、父上の威光だって使います。

きつとこんな卑怯な娘、嫌がられるでしょう。

でもたとえお飾りになっても、あの方のお傍に居たいのです。

「……受けて頂けるでしょうか」

ラドウガの封蠟を押した求婚状を胸に私は呟きます。

嘆き続けていたお父様でしたが、

急に真顔になると、いやに低い声で言い切りました。

「その時は地獄を見るだけだ」

どうしましょう、お父様の目が笑ってません。

……ああ、ボルケノ様。

いざとなったら私、死ぬ気で抑えますから！

ここが物語の始まり（後書き）

次でようやく対面します、おそらく。

父が嫌いな訳ではありません。ただ優先順位があるのです。
お付き合いくださりありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1729ba/>

疵の王と陽だまり王妃

2012年1月4日12時49分発行